

[短 報]

医療福祉系大学に所属する学生の抑うつ症状とその関連要因について

志渡 晃一¹⁾ 米田 政葉²⁾ 吉田 貴普³⁾

1) 北海道医療大学大学院看護福祉学研究科

2) 北海道医療大学看護福祉学部

3) 北海道医療大学大学院看護福祉学研究科博士前期課程

キーワード

抑うつ症状, CES-D, SOC, 学生

I 緒言

これまでの我々の調査において、学生の約6割が抑うつ症状を呈していた。その関連要因として生活習慣や健康状態、人間関係や生活の満足度、首尾一貫感覚などについての関連が報告されてきた^{1)~5)}。そのため、学生に対するメンタルヘルスを中心とした包括的な支援の必要性について提言されてきた。本研究においては、医療福祉系大学生を対象とし、抑うつ症状とその関連要因についてを明らかにすることを目的とした。

II 研究方法

1. 調査対象及び期間

医療福祉系大学に所属する学生298名を対象とし、2013年7月1日～11月20日の間で行った。

2. 調査内容

質問項目は、1) 性別、年齢などの基本属性に関する4項目、2) CES-D日本語版20項目、3) Breslow-Morimotoの9つの健康習慣のうち労働に関する項目を除く日常生活に関する8項目と健康状態に関する1項目の計9項目、4) 日常生活の満足度9項目、5) SOC日本語版13項目、の計55項目である。

3. 集計と分析方法

1) 集計方法

回収した質問紙を基に、表計算ソフト (Microsoft Excel) を用いてデータセットを作成した。CES-Dは20項目4件法で質問し0点～3点を配点した。合計得点は0点～60点の範囲であり、0点～15点を「低う

つ」群、16点～60点を「高うつ」群に分類した。SOCは各項目を7段階で評価し、1点～7点を配点した。学校・日常生活・対人関係における満足度は各項目10件法で質問した。

2) 分析方法

高うつ群・低うつ群を目的変数とし、その他の変数を説明変数とした。その後目的変数と個々の説明変数について群間の比較を見るために χ^2 検定を行った。またCES-DとSOCの関連を見るためにスピアーマンの順位相関係数を用いて分析を行った。

III 倫理的配慮

調査は著者所属大学の倫理委員会の承認を得て行った。調査対象者に1) 結果の公表に当たっては、統計的に処理し、個人を特定されることはないこと。2) 調査によって得られたデータは、研究以外の目的で使用しないこと。3) 調査に参加しないことで不利益を被ることはないこと、かつ途中での同意撤回を認めるという条件を書面において十分に説明し、口頭でも説明した。同意した対象者の身に質問紙票に記入を依頼した。

IV 結果

1. 集計

在籍者数390名のうち298名から回答を得た (回収率76.4%) 回答に不備のあったものを除く286名 (有効回答率96.0%) を以下の分析対象にした。

2. CES-Dの分布

表1に抑うつ状態の分布を性別に示した。

全体での高うつ群 (CES-D得点16点以上) の割合は60.4%であった。また、男性60.0%、女性63.7%であった。男性と比較して女性の方が抑うつ傾向が高く見られたが、有意差は認められなかった。

3. SOCとCES-Dの関連

図1に見られるように、SOC得点が高くなればな

<連絡先>

志渡 晃一

〒061-0293 北海道石狩郡当別町金沢1757

北海道医療大学大学院看護福祉学研究科

TEL: 0133-23-1532

E-mail: kochan@hoku-iryo-u.ac.jp

表1 性別のCES-D得点の分布

うつ状態	得点	N (%)		
		男 性 70 (100)	女 性 285 (100)	合 計 355 (100)
低 う つ 群	: 0~15	28 (40)	78 (36.3)	106 (37.2)
高 う つ 群	: 16~60	42 (60)	137 (63.7)	179 (62.8)

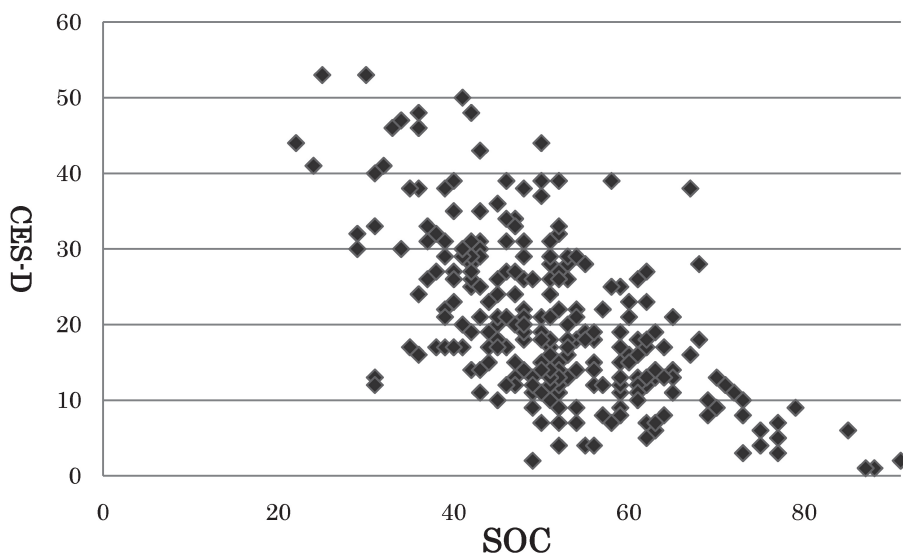


図1 CES-DとSOCの相関
(N=286, $r=-0.58$, $p<0.05$ by Spearman)

るほど、CES-D得点は低くなる負の相関がみられた。

4. CES-Dと生活習慣の関連

表2に抑うつ症状と生活習慣の関連を示した。

「健康状態がいい」の項目において高うつ群では49.4%であったのに対し、低うつ群では72.6%と有意に高かった。また、「悩みやストレスがある」では高うつ群においては78.9%であるのに対し、低うつ群では46.7%と有意に低かった。

5. CES-Dと生活満足度の関連

表3に抑うつ症状と生活満足度の関連を示した。

「講義に満足している」「教員との関係に満足している」「先輩との関係に満足している」「学校生活全般に満足している」「家族との関係に満足している」「学外での生活に満足している」の6項目において、高うつ群と比較し低うつ群で有意に満足度が高かった。多変量解析において、「学外での生活に満足している」の一項目のみが独立した項目として検出された。

V 考察

本研究では医療福祉系学生を対象に抑うつとその関連要因について検討した。うつ状態の分布に関して

は、高うつ群の割合は60.4%と高い割合であった。この結果は、学生を対象とした先行研究と同様に高い割合であった。SOCとCES-Dの関連に関しては、本研究でもこれまでに行われた調査⁴⁾と同様に、SOCが高まるほどCES-Dが低下するという負の相関関係($r=-0.58$)が見られた。

抑うつと生活習慣の関連では「健康状態がいい」の項目において高うつ群と比較し低うつ群では、有意に健康であると感じている者の割合が高かった。これらのことから、学生が主観的健康感を良いと感じられるような生活習慣を送ることは、抑うつ症状を低下させるための要因であると考えられる。また、国友らの研究⁶⁾によると、生活習慣が健康状態と関連していると述べており、生活習慣と抑うつ症状には関連があると考えられる。そのため先行研究¹⁾⁻⁵⁾と同様に生活習慣の改善や生活が充実するよう介入することで抑うつ症状の低下につながると考えられる。「悩みを感じている」の項目では高うつ群と比較し低うつ群では、有意に低かった。これらは先行研究⁵⁾と同様の結果である。

抑うつ症状と生活満足度の項目では、「講義に満足している」「教員との関係に満足している」「先輩との関係に満足している」「学校生活全般に満足している」「家族との関係に満足している」「学外での生活に

表2 抑うつ症状と生活習慣の関係

		N (%)	
No.	質 問 項 目	低うつ群	高うつ群
1	健康状態がいい	77 (72.6)	89 (49.4) *
2	悩みやストレスがある	49 (46.7)	142 (78.9) *
3	運動の継続している	28 (26.7)	45 (25.0)
4	お酒は毎日飲まない	104 (98.1)	174 (97.2)
5	たばこは吸わない	101 (95.3)	170 (96.0)
6	たばこのポイ捨てが気になる	93 (87.7)	162 (90.0)
7	許可されてない場所での喫煙が気になる	94 (88.7)	150 (83.3)
8	屋外での喫煙が気になる	68 (64.2)	117 (65.0)
9	睡眠時間 6 時間以上 8 時間未満	34 (32.1)	44 (24.6)
10	朝食を毎日食べる	79 (74.5)	120 (66.7)
11	栄養バランス考える	79 (74.5)	133 (73.9)
12	ダイエットしている	51 (48.1)	99 (55.0)

* : Fisher の直接確立法 : $p < 0.05$

a : 個々の設問項目で欠損値が生じることがあるため、度数が同じでも%が異なることがある。

注：設問 1 ①よい、②まあよい、③普通、④あまりよくない、⑤よくないの 5 選択肢を設定し、①②を適正群、③④⑤を非適正群とした。

設問 2 ①ある、②ないの 2 選択肢を設定し、①を適正群、②を非適正群とした。

設問 3 ①している、②していないの 2 選択肢を設定し、①を適正群、②を非適正群とした。

設問 4 ①毎日、②週 5 - 6 日、③週 3 - 4 日、④週 1 - 2 日、⑤月 1 - 3 日、⑥飲まないの 6 選択肢を設定し、①を非適正群、②③④⑤⑥を適正群とした。

設問 5 ①毎日吸う、②ときどき吸う日がある、③以前吸っていたが 1 ヶ月以上吸っていない、④吸わないの 4 選択肢を設定し、①②を非適正群、③④を適正群とした。

設問 6, 7, 8 ①非常に気になる、②気になる、③どちらでもない、④気にならないを設置し①②を適正群、③④を非適正群とした。

設問 9 ① 5 時間未満、② 5 ~ 6 時間未満、③ 6 ~ 7 時間未満、④ 7 ~ 8 時間未満、⑤ 8 ~ 9 時間未満、⑥ 9 時間以上の 6 選択肢を設定し、①②を非適正群、③④を標準群、⑤⑥を適正群とした。

設問 10 ①ほとんど毎日食べる、②週 2 - 3 日食べない、③週 4 - 5 食べない、④ほとんど食べないの 4 選択肢を設定し、①を適正群、②③④を非適正群とした。

設問 11 ①毎日考える、②時々考える、③ほとんど考えない、④全く考えないの 4 選択肢を設定し、①②を適正群、③④を非適正群とした。

設問 12 ①している、②時々する、③ほとんどしない、④全くしないの 4 択肢を設定し、①②を非適正群、③④を適正群とした。

表3 抑うつ症状と生活満足度

		N (%)	
No.	質 問 項 目	低うつ群	高うつ群
1	講義に満足している	71 (67.0)	94 (52.2) *
2	学校施設に満足している	62 (59.0)	87 (48.3)
3	教員との関係に満足している	67 (63.8)	77 (43.0) *
4	先輩との関係に満足している	68 (64.2)	107 (59.8) *
5	同級生との関係に満足している	86 (81.1)	134 (74.4)
6	学校生活全般に満足している	73 (69.5)	101 (56.1) *
7	家族・学校以外の友人との関係に満足している	93 (88.6)	145 (80.6)
8	家族との関係に満足している	91 (85.8)	134 (74.4) *
9	学外での生活に満足している	89 (84.0)	116 (64.4) * §

* : Fisher の直接確率法 $p < 0.05$ § : 多変量解析 (ロジスティックモデル) $p < 0.05$ 性、年齢によって調整

a : 個々の設問項目で欠損値が生じることがあるため、度数が同じでも%が異なることがある。

注：各設問について「不満足」～「満足」の10段階の点数を設定し、1～5点を不満群、6～10点を満足群とした。

満足している」の6項目において、高うつ群と比較し低うつ群で有意に満足度が高かった。これはこれまでの研究⁵⁾と同様の結果を得られたと考える。このことから、学内外両面において人間関係を中心とし、生活の全般に対し満足感を得られるように支援していくことで、抑うつ症状を低下させることが出来ると考える。

今回の研究においては、回収率、有効回答率ともに高く、結果の信頼性は高いと考える。

ただし、本研究は横断的研究であるため、抑うつ症状とその関連要因に関する因果関係が明示されたわけではないことに留意する必要がある。

VI 謝辞

本研究の趣旨をご理解いただき、ご協力くださった皆様に心より感謝いたします。

付記

本研究の一部は喫煙科学研究財団の支援を受けて行ったものである。

文献

- 1) 澤目亜希, 佐藤厳光, 上原尚紘, 他. 看護系専門学校生の抑うつ症状とストレス対処能力 (SOC) との関連について. 北海道医療大学学部学会誌 (2011); 7(1): 89-92.
- 2) 峰岸夕紀子, 坂手誠治, 志渡晃一. 本学新入学生のうつ傾向とその関連要因. 北海道医療大学学部学会誌 (2010); 6(1): 87-91.
- 3) 澤目亜希, 上原尚紘, 佐藤厳光, 他. 大学新入学生の抑うつ症状とその関連要因(第2報) ~CES-Dの高得点群の特徴について~. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌 (2011); 7(1): 93-95.
- 4) 志渡晃一, 澤目亜希, 上原尚紘, 他. 首尾一貫感覚 (SOC) と抑うつ症状との関連—高等教育機関に所属する学生を対象として—. 北海道医療大学看護福祉学部紀要 (2011); 18: 43-48
- 5) 澤目亜希, 上原尚紘, 佐藤厳光, 他. 大学新入学生における抑うつ症状とその関連要因. 北海道医療大学学部学会誌 (2012); 8(1): 57-61.
- 6) 国友宏渉, 江上いすず, 長谷川昇, 他. 学生の健康に及ぼす生活習慣の影響. 名古屋文理短期大学紀要 (1999); 24: 75-79.

受付: 2013年11月30日

受理: 2014年3月6日